



模写・模造と日本美術

—うつつ・まなぶ・つたえる—

2005年7月20日(水)～9月11日(日)

東京国立博物館 平成館

模写・模造は創造の原点だ

模写とは、平面的な作品をまねて写すことであり、模造とは立体的な作品を実物に似せて造ることを意味します。模写・模造というと、「本物ではないもの」として一般的には評価されません。しかし、美術工芸の制作においては、模写・模造こそがさらなる創造を生み出す原点であり、また古典の再生をもたらす原動力となってきました。

名宝となった模写・模造

西洋では、ギリシア美術を偉大な師として学んだグレコ・ローマン時代のローマで、ギリシア古典彫刻の名作が数多く大理石に模刻され現在まで伝えられています。また、中国で最高の画家として不朽の名声を残す東晋の顧愷之は、「女史箴図巻」や「洛神賦図巻」など、唐宋時代の名品の模写によって、その卓越した画業を今に伝えています。北宋の皇帝画家・徽宗による、唐代宮女画の名手・張萱の「搗練図巻」の模写は、今やボストン美術館の名宝として知られるようになってきました。

このように古典を模写・模造することは、洋の東西に共通する美術制作の基本のひとつとなってきました。それは古典に不動の価値観と普遍の美が存在するからでしょう。だからこそ人々は古典に学んできたわけです。人々はそこから形態・技法そして造形精神を学び取ったのです。中国美術の古典的理論書である南齊・謝赫の「古画品録」に定められた六法のうちにも、「伝移模写」が掲げられており、いかに模写・模造が美術制作の規範として重要視されたかがわかります。こうした謝赫の理論は、日本美術にも大きな影響をもたらしました。

うつつ、まなぶ伝統

中国文化を規範とした古代日本においては、天平の文化人を代表する光明皇后が、書聖・王羲之の書を見ながらそれを写した臨写「楽毅論」が正倉院宝物として伝えられています。また平安和様彫刻を大成した仏師定朝は、白鳳の大安寺釈迦像を模刻し、鎌倉ルネッサンスと呼ばれる彫刻美術の再生を成し遂げた仏師快慶は、天平彫刻の傑作である東大寺法華堂の執金剛神像を模刻しています。室町時代には、雪舟が中国南宋山水画を規範として模写し、やがて独創的な水墨山水画風を確立します。そして江戸画壇を指導した狩野派の絵師は、漢画の規範として雪舟を学んだのです。このように奈良時代から江戸時代にかけては芸術活動の一環として模写・模造が行われてきたといえます。

岡倉天心の思想

明治維新後の近代日本において、模写・模造こそが新たな創造をもたらす古典再生の原点であることを最初に理解したのは、廃仏毀釈の嵐が吹き荒れる最中の明治5年に、法隆寺や正倉院の宝物調査を行った博物

館初代館長の町田久成でした。このとき町田は一刀彫の森川杜園を起用して正倉院宝物の模造を制作させています。この町田の思想を受け継ぎ廃仏毀釈によって打ち捨てられ荒廃に瀕した仏像や仏画を日本美術のすぐれた所産として再評価し、近代日本美術の構築に奔走したのが岡倉天心でした。東京美術学校長であり、帝国博物館美術部長であった天心はフェノロサとともに、のちに近代日本画の旗手となった横山大観や下村観山、近代木彫の先駆者となった竹内久一など、新進気鋭の美術家たちに古典美術の重要性を説き、その模写・模造を精力的に推進させました。こうした模写・模造が、近代日本美術にさらなる創造をもたらしたことは、その後の彼らの輝かしい創作活動をみれば明らかな事実です。そして彼らが制作した模写・模造作品は、博物館での展観などにも活用され、近代日本の美術教育を支えてきました。

天心の精神はその後、文化庁や宮内庁正倉院事務所等の模写・模造事業にも引き継がれています。

この特別展では、こうした近代の美術家たちによる日本美術史上の名宝の模写・模造作品、ならびに建築模型を紹介することによって、日本美術における模写・模造の歴史を概観し、あわせて近代日本美術の創造の原点をご覧ください。そして模写・模造作品それ自体の美術工芸的価値にも光を当てていきます。

さらに、保存環境の問題で話題の高松塚古墳壁画の模写や、火災により失われた法隆寺金堂壁画の模写なども展示し、文化財を「つたえる」という模写・模造の大きな役割にも注目します。

開催概要

特別展「模写・模造と日本美術 ―うつす・まなぶ・つたえる―」

2005年7月20日(水)～9月11日(日) 東京国立博物館 平成館 特別展示室第4室

主催 東京国立博物館

開館時間 9:30～17:00

金曜は20:00まで、土・日曜は18:00まで (入館は閉館の30分前まで)

休館 月曜休館、ただし8月15日(月)は開館

観覧料 一般420(210)円 大学130(70)円

*平常料金でご覧いただけます。

* () 内は20名以上の団体料金です。

*高校生以下と満65歳以上の方は無料。入館の際に、年齢のわかるもの(生徒手帳、健康保険証など)をご提示ください

*障害者とその介護者1名は無料です。入館の際障害者手帳などをご提示下さい。

【同時開催】

親と子のギャラリー「うつす・まなぶ・つたえる」

2005年7月20日(水)～9月11日(日) 東京国立博物館 平成館 特別展示室第3室

お問合せ 03-5777-8600 (ハローダイヤル) ホームページ <http://www.tnm.jp/>

交通 JR上野駅公園口、鶯谷駅から徒歩10分

東京メトロ上野駅・根津駅、京成電鉄京成上野駅から徒歩15分

模写・模造と日本美術—うつす・まなぶ・つたえる— 各章の解説と主な作品

I 古典にまなぶ

古典を模写して、その造形精神を忠実に学び取ることは、新たな創造を生み出す原点です。ここでは近世と近代の巨匠たちによる模写作品をご覧ください。

1 近世

夏珪・雪舟・狩野派

日本水墨画の祖・雪舟は、中国南宋の夏珪（かけい）の山水画を模写によって研究し「秋冬山水図」や「山水長巻」にみる独創的な水墨山水画法を完成させました。

江戸画壇を指導した狩野派の絵師は、漢画の規範として雪舟を学びました。狩野常信の「流書手鑑」にある「四季山水図」は、夏珪の作品を雪舟が模写し、さらに常信が模写したものです。また狩野古信は17メートルを超える雪舟の「山水長巻」を全巻模写しています。

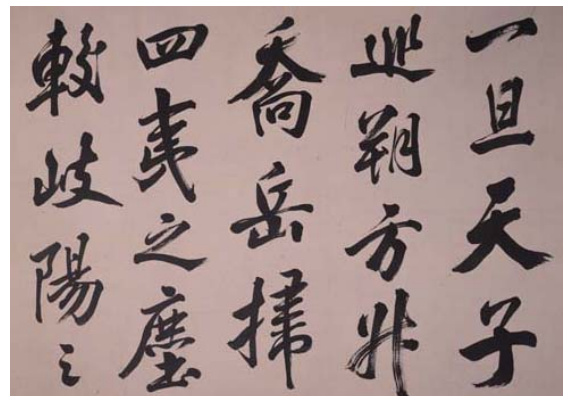
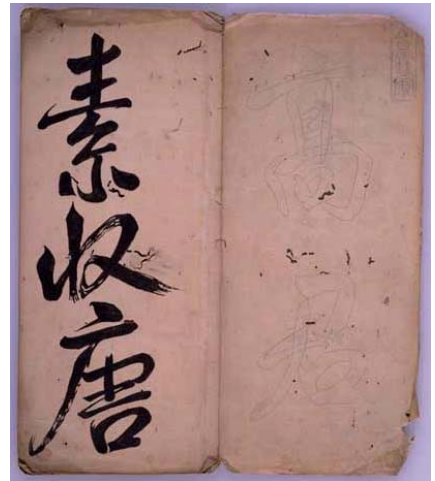


流書手鑑 狩野常信 江戸時代・17～18世紀 32.4×624.2cm
東京国立博物館蔵 原品：雪舟 室町時代

臨書と双鉤填墨

模写は、書においてもっとも重要な学習方法です。手本とする名筆、すなわち原本の上に紙を載せ、文字の輪郭をまず写し取り、その内側に墨を埋めていく模写の方法を双鉤填墨（そうこうてんぼく）といい、原本を傍において、それを見ながら写し取る方法を臨書（りんしょ）といいます。双鉤填墨は原本の形をそのままに再現でき、臨書は字形・用筆・結構などを学ぶことができます。臨書は、字形を真似ることに主眼をおく形臨、筆者の筆意を汲み取って学ぶ意臨とに、大きく分けて考えられます。後者は、臨書する人の美意識や個性が臨書作品に反映します。そうして次第に自らが創作する作品へと移行することになります。

市河米庵の二つの「天馬賦」は、米庵が私淑する米元章（べいげんしょう）の拓本を学んだものです。図版上は、十代において字形の学ぶことに主眼をおいた模写。図版下は、最晩年における遺墨で部分的には米庵自身の作品的な要素がみえる臨書。幕末の三筆の一人、江戸時代を代表する能書であった米庵が、生涯にわたって模写による学書につとめたことを示す好資料といえます。



上：天馬賦 市河米庵 江戸時代・寛永7年(1795) 31.7×13.8cm
東京国立博物館蔵 原品：米元章 北宋時代・12世紀

下：臨天馬賦 市河米庵 江戸時代・安政5年(1858) 45.7×1257.5cm
東京国立博物館蔵 原品：米元章 北宋時代・12世紀

模写・模造と日本美術 —うつつ・まなぶ・つたえる—

各章の解説と主な作品

2 近代

明治22年(1889)、古い伝統をふまえながら新しい日本美術の創生を目指していた岡倉天心が、帝国博物館（のちの東京国立博物館）の美術部長に就任し、同時に、東京美術学校の校長に就任しました。天心は東京美術学校の彫刻科に日本固有の木彫のみを採用し、明治23年には帝国博物館美術部長として、東京美術学校に木彫技法による仏像の模造制作を委嘱しました。こうして、明治24年に東大寺法華堂の執金剛神像、月光菩薩像、興福寺の無著像、明治25年には東大寺戒壇院の広目天像、興福寺の維摩居士像の模造が、いずれも竹内久一によって制作されました。

天心はこれら模写・模造作品を、美術教育を目的として博物館の展示に活用しました。その後も国立博物館の事業として継続された模写・模造は、近代日本美術にさらなる創造をもたらし、また近代日本の美術教育を支えた点で、大きな歴史的意義が認められます。

竹内久一の執金剛神像

天平彫刻の最高傑作とされる東大寺法華堂の塑造原像を、竹内久一が木彫に再現した作品です。迫真的な表現と華麗な彩色がそのままに写し取られています。古典彫刻に学んだ竹内久一は、やがて近代木彫を代表する伎芸天女像を制作し、近代木彫の父と称されました。



執金剛神立像 竹内久一 明治24年(1891)
総高181.8cm 東京国立博物館蔵
原品：東大寺蔵 奈良時代

田中親美の本願寺本三十六人家集

平安時代料紙装飾の精華とされる本願寺本・三十六人家集を、田中親美が当時の技法を忠実に再現して複製したもの。田中親美は「源氏物語絵巻」や「平家納経」なども模写複製しました。

本願寺本三十六人家集 田中親美 明治40年(1907) 20.2×15.8cm
東京国立博物館蔵 原品：西本願寺蔵 平安～江戸時代



横山大観の牧谿と雪舟

「観音猿鶴図」は、中国水墨画の最高峰とされた南宋の画僧牧谿の代表作を、横山大観が模写した作品。大観は牧谿から中国水墨画の技法を学んで、近代日本水墨画を代表する「生々流転」を制作しました。雪舟の「四季山水図」を模写研究し、その成果を近代山水画の傑作「瀟湘八景」に結実させました。

左：四季山水図 横山大観 明治30年(1897)
71.2×44.2cm 東京国立博物館蔵
原品：雪舟 プリヂストン美術館蔵 室町時代
右：観音猿鶴図(猿図) 横山大観 明治28年(1895)
173.0×97.0cm 東京国立博物館蔵
原品：牧谿 大徳寺蔵 南宋時代



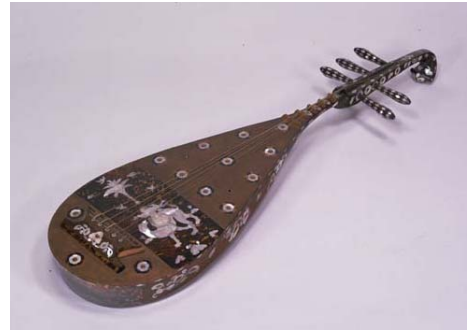
模写・模造と日本美術—うつす・まなぶ・つたえる—

各章の解説と主な作品

II 正倉院にまなぶ

奈良・正倉院には、聖武天皇、光明皇后ゆかりの名宝として天平芸術の粹ともいわれる工芸品の数々が伝えられています。古来、その高い芸術性と高度な技術に多くの工芸家が学んできました。それは単なる形の模倣だけでなく、技術の伝承をも意味しています。

正倉院宝物の模造は、江戸時代から行われたといわれますが、本格的な制作は明治時代にはいつてからのことでした。奈良における博覧会（明治8年(1875)第1回～明治23年第15回）での展示を契機として「宝器の保存」の重要性がさげばれ、模造事業が推進されたのです。現代までに制作された数は数百点にのぼり、その大部分は正倉院、東京国立博物館、奈良国立博物館に保管されています。正倉院模造は「研究による復元模造」として、学術的価値もきわめて高く、後世の日本工芸の発展に多大な影響を及ぼしています。



螺鈿紫檀五弦琵琶 明治時代・19世紀
長107.0cm 横33.3cm 東京国立博物館蔵
原品：宮内庁正倉院事務所蔵 奈良時代

III 文化財をつたえる

日本美術の素材は環境の変化を受けやすい脆弱なものが大半を占めており、最善の修理や保存の方策をとっても時間の経過とともに退色や劣化が進んでしまうという宿命を負っています。カビの発生や退色の問題で話題となっている高松塚古墳の壁画などはその代表例といえます。さらに、時として思いもよらぬ災害に巻き込まれ、文化財は損壊あるいは消滅してしまうことさえあります。しかし私たちは、模写・模造によって原品の価値を認識することができるとともに、そのすばらしさを後世に伝えることができます。

一方、模写・模造を行う場合、その文化財について、精細な調査・分析が行われています。この過程で私たちは、材質・構造・技法・色彩などに関するさまざまな情報を得ることができます。学術的にも貴重なこれらの情報をもとに行われる復元模造の制作は、単にその形を写すのではなく、伝統的な技術を後世に伝承することにもつながっています。さらに、建造物に付属する壁画など、その環境によって、移動や公開が困難な文化財については、模写・模造がその代役を果たすことができるのです。

模写・模造は、文化財を後世に伝えることの重要性を改めて教えてくれています。

法隆寺金堂壁画 模写

明治初期、フェノロサや岡倉天心らによって日本美術の精髓としての価値を見出された奈良・法隆寺の金堂壁画。昭和15年(1940)から、法隆寺昭和大修理の一環として、壁画の模写事業が開始されました。日中戦争の影響などで模写作業に遅れがでているなか、昭和24年1月26日未明の金堂火災で壁画の大半が焼失してしまったのです。模写事業も、第6号壁など数面を除くほとんどが未完のまま終わってしまいました。しかし、このときに制作された模写は、在りし日の壁画の面影を今に伝える唯一の貴重な資料となっています。



法隆寺金堂壁画(10号) 荒井寛方ほか 昭和時代・20世紀
311.8×259.4cm 法隆寺蔵 原品：法隆寺蔵 飛鳥時代

模写・模造と日本美術—うつす・まなぶ・つたえる—

各章の解説と主な作品

高松塚古墳壁画 模写

昭和 47 年（1972）3 月、奈良・明日香村の高松塚古墳石室内で、四方に四神を配し、大陸的な女官を描いた壁画が発見されました。古墳は同年に特別史跡に、壁画は昭和 49 年に国宝に指定されました。すでに劣化している壁画下地の漆喰が崩れる可能性がある上、カビなどの雑菌が持ち込まれば直ちに画面は損なわれるおそれがあります。そこで文化庁による保存事業の一環として、発見の約 1 年後、約 10 ヶ月をかけて壁画の模写が行われました。制作にあったのは、前田青邨、平山郁夫など日本画家の重鎮たちでした。



高松塚古墳石室壁画（西壁） 前田青邨・平山郁夫
ほか 昭和時代・20世紀 奈良文化財研究所飛鳥資料館蔵
原品： 113.4×265.0 cm 飛鳥時代

関連事業

◆記念講演会：2005 年 8 月 13 日（土）13 時 30 分～15 時 平成館大講堂

「日本美術を伝える」日本美術院評議員・東京芸術大学教授 田淵俊夫

定員：380 名（事前申込制）

申込締切：7 月 29 日（金）必着

事前申込制（定員 380 名）、聴講無料（ただし当日の入館料が必要）

申込方法：官製往復はがきの「往信用裏面」に郵便番号・住所・氏名（ふりがな）・電話番号を、「返信用表面」に郵便番号・住所・氏名を明記の上、下記までお申し込みください。

* 1 枚のはがきで、1 人申込可能

* 応募多数の場合は、抽選のうえ聴講券を送ります

申込先：〒110-8712 東京都台東区上野公園 13-9 東京国立博物館教育講座室「模写」係

同時開催特別展

遣唐使・井真成の墓誌 いよいよ東京で公開！ 日中文化交流の原点に迫る展覧会

「遣唐使と唐の美術」

2005 年 7 月 20 日（水）～ 9 月 11 日（日）

東京国立博物館 平成館 特別展示室第 1 室、第 2 室

* プレスリリースは当館ウェブサイト「お知らせ」のページからダウンロードできます。

◇本リリース掲載写真、お貸し出し可能です◇

写真貸し出し、資料請求 展覧会広報事務局 tel03-3639-0721 fax 03-3664-3833

取材・展覧会の内容に関するお問い合わせ 東京国立博物館広報室 tel03-3822-1111 fax03-3822-0086

東京国立博物館の展示・催し物の情報は → <http://www.tnm.jp/>